

開講時期の変更に伴う教科教育法の授業改善

家政教育・金子 省子

1. 授業科目の概要

家庭科教育法の授業科目は、2 回生前期の家庭科教育法 を教科教育の教員が担当した後、2 回生後期に を教科専門の教員が担当し、これまで食物、被服領域を中心とした内容で行ってきた。昨年度より食物、被服、保育の3 領域に変更している。食物は谷本昌太・宇高順子教員、被服は眞鍋郁代教員。保育領域の履修時期は従来の教育法 の3 回生後期から、前倒しになり、また回数は7 回-8 回から5 回へと減少している。本年度の受講生は生活環境コース2 回生9 名、3 回生1 名、学校教育教員養成課程2 回生6 名、3 回生1 名。

家庭科教育法 の保育領域部分では、保育学習の今日的課題の理解と、教材研究、指導法の検討、授業分析を行って実践的な力を養うことを目的としている。

本年度の内容構成は、以下のようであった。

保育環境と家庭科保育学習の課題

家庭科保育学習の方法に関する課題（ロールプレイング実習）

演習（G1-3） 演習（G4-5） 演習（G6-7）

講義を行ったのち、特に保育領域の方法上の課題の1 つである体験的学習のなかから、個人学習は難しいロールプレイング実習を取り上げた。演習部分では、講義で指摘した課題に関連する7 つのテーマを提示し、希望によりグループ分け、レジュメ作成の説明等を行った。授業実践例などの参考資料については、授業時間外に閲覧、コピーできるよう配慮した。

2. 授業後のアンケートから

アンケートでは、9 項目について5 段階評定（a：強くそう思う b：ややそう思う c：どちらとも言えない d：あまりそう思わない e 全くそう思わない）で回答を求めた。また、良かった点と改善すべき点を自由記述で求めた。回答数は15 名である。

(1)「出席状況の良好さ」は、a が13 名、b が1 名、c が1 名で、全体的に良好だった。

(2)「内容構成の明確さ」については、a が4 名、b が10 名、c が1 名で、ほぼ理解されていたと考える。

(3)「講義と演習のバランスの適切さ」については、a が7 名、b が8 名で、授業形態についての受け止めは良好だった。

(4)「学生が捉える履修時期の適切さ」について尋ねた。開講時期については、2 回生前期と3 回生前期と後期を各1 名があげたものの、他は、現状の2 回生後期や特に希望がないという意見だった。

(5)「演習への教員のサポートの適切さ」については、a が3 名、b が7 名と概ね肯定的な意見だが、c が5 名いた。今回、発表用参考資料は、教員が準備したもので、自身が収集したものを活用してもよいこととした。教員が準備した資料については、1 週間程度で閲覧しコピー等するようにした。大半の学生が教員の準備した資料のなかから選択していた。学生の考える適切なサポートの1 つは、自由記述からうかがえるようなレジュメ作成上の例示等のことであると推測される。生活環境コースの学生は、1 回生必修でレジュメ作成を行う機会があり、2 回生では、それぞれのテーマと資料の特徴をふまえて自由な様式で作成させたいと考えたが、数名の学生には戸惑いがあったのかもしれない。質問者には個別に対応したが、「今後の実習や指導案づくりに活用できるような実践例等の分析」という趣旨を十分に理解できるように丁寧な説明が必要だった。また、学校教育教員養成課程の学生でレジュメ作成を行う「保育学演習」を受講しない場合も時にあることから、さらに丁寧な対応が必要となるかもしれない。

(6)「演習への意欲的取り組み・準備」については、a が8 名、b が6 名、c が1 名で、意欲的に取り組めたという学生が多い。

(7)「演習での他の発表からの学び」については、a は10 名b が5 名と高い評価となった。

(8)「保育領域の指導にかかわる学習内容が学べたか」という点では、a が9 名、b が6 名で、これについても肯定的な回答だった。

(9)「今後意欲をもって学びたい課題の発見」については、aが5名、bが9名と概ね肯定的な回答であるが、dが1名いた。

自由記述の「良かった点」は、全員が記述しており次の4点にまとめられる。

資料作成の効果

「資料をもとにまとめ理解しようとした」や「作業に主体的に取り組めた」

演習による情報の獲得

「発表や情報共有の機会が豊富」「保育分野の様々な情報を得られた」「調査、発表で、共有して短時間で効率よく学習できた」「いろいろな発表を聞き、気付かなかった部分や、さらに考えを深められた」「実際の授業での改善点も見つけることができよかった」「同じテーマでも2、3人が違う内容の事例を紹介してくれとても参考になった」「発表後の先生の説明でまた新たな考え方などリアルタイムな情報を得られる」など。

ロールプレイング実習

前半の講義部分と後半の演習で取り上げたことから、「ロールプレイングの良さや活用の仕方を体験できた」

今後への活用

「様々な資料を読むことができ、今後実習などで困った時、振り返ることが可能だと思う」など。

一方で、「改善すべき点」としては、5名が記述していた。「資料作成の際の例示があるとスムーズに作業ができたと思う」など資料作成の支援については3名の指摘がある。「レポートの提出日を全員同じに」や「一部のグループが比較的楽に見えた」というような負担の公平性に関する指摘もみられた。主体性を尊重しつつも、特に異質な発表方法をとらざるを得ないテーマに関しての準備過程へのかかわりを工夫する必要があった。

3. 授業後の振り返りレポートから

自由に記述されたものを、次のような観点でまとめ、一部を要約して記載する。

・保育分野の重要性の認識と視野の広がり

「保育学習の意義やねらいを知ったり考えたりできた」「短い時間の中で多様な授業事例を学ぶことができた」

・教材開発、指導法、評価の課題

「体験学習のいろいろな方法が学べた。1つの活動が、方法を変えることで違った学習になるのだと思った」「教師のアイデア、教材研究の大切さ」「活動や評価の仕方など、教師の目線、生徒の目線から考えさせられた」「教育法と地域の状況の違いなどもさらに考えてみたい」

「理解、関心を深めるために、なにを取り込むか、体感、自分に結びつける学習の大事さ」「ロールプレイングは道德など他でも有効に活用したいと思う」「おもちゃを作ることを評価対象にし、工夫で態度面をみるような評価の問題に気づいた」

・発表による学び

「時間内に、特に伝えたいものを考えて発表をすることで、より深く考えることができた」「レジュメや話すことなど、うまく相手に伝えるなどの学びにつながった」「自分にない考えを深め、違う視点から考えられるようになった」

・今後の学習や実践への活用

今後への活用については、ほとんどの学生が言及している。「授業事例を学べ今後につながる。皆が発表したものを実践できる日がくるといい。」「学んだ教材や教具をイメージしながら自分なりに授業をつくっていききたい」

以上のように、学習成果を、指導方法、教材化、授業構成の視点、評価などについて捉えていること、ほとんどの学生が今後の教育法の授業での展開や実習への活用を意識しているなど、実践的指導力の基礎になる部分が育っているのではないかと考えられる。

4. 考察及び今後の課題

教育法（2009年度3回生後期）の授業アンケートでは、教壇に立つことに向けての意識づけも含めた学習成果の評価が全体的に高い結果であった。開講時期が2回生後期となった本授業でも、実習に向けて、また、先の指導案作成に向けての活用に肯定的な評価がみられた。

教科教育法のなかでの限られた時間のなかで、実習時期を異にする2つの課程、選択科目の履修の個人差をふまえ、専門科目の授業内容との関連づけを今後もきめ細かくしていく必要がある。

本年度は同時期の学校教育教員養成課程「保育学演習」の受講生2名が、この教育法の履修生でもあったため、「保育学演習」のなかで、関連づけができるようにした。

一方、この教育法の受講生の多くは生活環境コースの2回生であり、3回生前後に「生活主体の形成と環境」を多くが受講することから、乳幼児期と成人期に関する学習回に保育領域の指導に関する今回の学習内容を関連づけ定着をはかることも可能と考える。